

「アガベ」(題字・伊藤博胤)

 日本社会事業大学
Japan College of Social Work

アガベ

日本社会事業大学同窓会北海道支部【(2019年10月10日発行 第26号)】

(事務局・仁木町大江2-457大江学園内 0135-32-3662)

【社会福祉随想リレー】

発達障害のある人への支援と自分

～大学時代から今に至るまで・その1～

2007年度卒(札幌市自閉症・発達障害支援センターおがる)

塚本 由希乃

現在、私は社会福祉法人はるにれの里に在籍し、法人内では、発達障害者支援センターに所属しています。ここは札幌市から委託を受け、業務としては、相談、コンサルテーション、研修講師など発達障害のある人が地域で生活を送っていくための諸支援を行なっています。

私は大学では社会福祉を、大学院では心理学を学びました。現在の業務では、大学での社会福祉の学びやその業務の経験、そして、大学院での心理学の学びとその業務の経験を両方を活かし、働くことができています。

現在33歳で、仕事としては未だ、始まったばかりのような感覚で仕事をしている私です。ただ振り返ってみると、今に至るまで、紆余曲折を含め、何度かの岐路があったことを思い出しました。

今回、アガベへの執筆の依頼があり、この機会に、これまで関わってきた仕事の経験や問題意識、ターニングポイントなど、自分が踏んできた経緯を書いてみたいと思います。

私は、2006年の4月に日本社会事業大学社会福祉学部福祉援助学科に3年次編入学をしました。元々は、短期大学の英文科に在籍し、2年生になると就職活動もしていました。しかし、短大英文科に集まる求人は、英語を使う仕事はほんの一部で、美容関係、アパレル関係など、学んだこととは直接関係のないものが多く、自分には、就活もその仕事への就職自体もいまいちピンと来ませんでした。自分のこれからの人生について、初めて建設的に考えたのはこのタイミングでした。仕事が生きてモチベーションとなること、続けるほどキャリアアップになる仕事であること、また探究心を追求し続けられる分野であ

ることなどを前提に、この先の仕事について改めて考えた記憶があります。まずはその基礎となる「何か」を、あと2年（編入学で）で学ぶことを決め、その先のことはその学びの延長で繋げていこうと考えました。

当時、歴史を学ぶことにも興味があった中で、なぜ福祉分野の学びを選んだのかというと、決め手は本当にひよんなきっかけからでした。

学ぶ分野を模索している中で、近所の大学で虐待防止に関する学会があり、家族の勧めもあり、気軽な気持ちで参加してみました。学会では、様々な分科会をのぞきました。その一つであった児童相談所の所長からの話は、印象深いものでした。幼い女の子が義父から性的な虐待を受けていた、という話でした。とても具体的でリアルな話な話でした。そういった話を支援現場の人から聴くのが初めてだった私は、言葉が出なかったのを覚えています。そして、同時にそういった話を淡々と話す所長の様子もとても印象として残りました。なぜ、所長はこのような話を淡々と話すのだろうと、その様子と話している事実は、相反しているような違和感を感じました。まずは、こういった虐待の事実がどうして起こるのか、すぐく当たり前のこととして、学ばなくてはいけないように感じました。

とは言っても、当時は子どもの虐待関連の仕事に就きたいとまでは思っておらず、まずこのことを学ぶ中で、元々考えていたモチベーションの持てるような仕事にも繋がるだろう、と漠然と考えました。

そこからは、社会福祉関係の大学をいくつか選択して受験し、家族の勧めもあって、日本社会事業大学に編入学をしたのです。

当時、編入学という形ではありながら、福祉援助学科と福祉計画学科では合計で40名程度（それ以上？）もの編入学生がいました。東京都内から通う学生、関東近辺で親元を離れて一人暮らしをしている学生など様々でした。北海道出身の学生も1人いました。全体で見ると、保育士養成の短大や専門学校を卒業して編入してきていた学生が多かったように思います。

2年間の社大生活では、社会福祉士実習、就職活動、国家試験の勉強とそれなりに忙しかったと思います。しかし、英文科から来た私にとっては、生活の中で当たり前のように思うことを深く学ぶ社会福祉という分野が新鮮で、興味深く思っていました。

子ども関係の授業を中心に履修をし、実習は児童養護施設に行きました。児童養護施設では、愛着障害と呼ばれる状態の子がたくさんいました。一人、背がとても小さな男の子がいました。その子が、さっきまで自分と一緒ににこにこ話していたと思っていたら、知らぬ間に私の後ろに回り、椅子を振り上げて立っていました。このとき、自分が学びたいと思った内容はこういうことなのか、と子どもの心への被虐待体験の影響にとっても気が重くなった記憶があります。

本当に色々な子どもがいました。多くの子どもたちは、施設内で虐待体験で被った心のケアを受けていました。そんな中に一人だけ、明らかに年齢に比べ言動や行動が幼く、同学年の相手の言っている意味がわかっておらず、的外れな行動や言動をしている、少し他の子と様子の違う男の子がいました。施設の職員から「この子は虐待を受けていない」との説明を聴きました（何か事情があり、一時的に預かっていたような経緯だったと思います）。しかし、私にはその子が困っているように見え、そこにいる子とは意味のちがうケアが必要なのではないかと感じていました。

養護施設という虐待や養育環境の問題からのフォローを目的としている施設では、その子のそういった様子はケアの対象にはなっていなかったのだと思います。それが2007年なので、子どもや障害の支援を学ぶ人にとって、発達障害という言葉が少しずつ聞かれ始めていたときだったのだらうと思います。その子のことが気にかかったことは実習の思い出の一つになり、そして、今につながる発達障害の支援への興味関心のきっかけになりました。

その後、講義の中で発達障害という言葉聞き、「あの子にはきっと発達障害があったんじゃないかな」と理解しました。発達障害というと、現在は、正しくは、知的に重い自閉症も知的には高い自閉症も、ADHDもLDも大きな括りの総称が正式です。しかし当時の私は、自分たちとそう変わらない、けど少しの違いがとても苦しい彼ら（軽度発達障害と呼ばれた対象の人たち）を発達障害と理解していました。そして、自分たちと発達障害に当てはまる人たちとの微妙な差、それが生まれる社会にも、発達障害という状態にも、とても関心を持ちました。

周りがもう少し知ったり理解したりすれば、その差はすぐに埋まる気がします。しかし、それがとても難しいということが、それまでの「障害者」と言われてきた人と大きな違いであるようにも感じました。

ちょうど大学4年生で、就職活動の時期だったので、彼らに関わることを仕事としようと考えようになり、その後、主に自閉症を含め発達障害の支援をしている東京の社会福祉法人に就職をしました。

しかし、その法人で、当初配属されたのは肢体不自由のグループでした。「発達障害じゃないのか」と当初は少し残念でした。しかし、働いていくうちに肢体不自由のグループでの仕事をとても楽しく感じることとなり、今考えても、この3年間は後に繋がる貴重な経験となったと思っています。

在籍している利用者は、脳性麻痺や脳症が原因の、重度の身体障害のある人がほとんどでした。知的面で言うと、平均の範囲の人、高い人もたくさんいました。利用者さんとはとても仲良くなり、話をしたり、活動を一緒にするのが楽しく、「こんなに楽しいのに、お給料をもらって良いのだろうか」と思うくらいでした。しかし、彼らを長く見て、毎日関わっていく中で、「彼らの本当の生きにくさとは何なのか」ということを考えるようになっていきました。

当時、私がしていた支援は、“肢体不自由という障害”のある人への支援でした。その中で、「今の支援は、彼らの障害に本当にアプローチしているのかな」と日々の自分の支援に疑問を持つようになっていったのです。

当時、その施設で肢体不自由の人たちに行なっていた支援とは、全員に共通しての動作法と、知的に重い人には自発性を育てる療育、知的に高い人には社会性を教えるといったものでした。肢体不自由の人は、身体が動かないことが大きな障害だと思いがちです。もちろんそれも障害ではあるのです。しかし実はもう一つ、彼らの支援対象として身体支援と同じくらいに、社会性の問題が考えられる人が少なくはないのです。

この社会性を教えるということがとても難しいことでした。事実スタッフはいつも試行錯誤していました。

たとえば社会性を教える活動の中で、“仲間同士で助け合う”をテーマとした時に、助

け合いが必要な場面をあえて設定し、“さあどう考えるのか・試行錯誤するのか”を狙いとしたことがありました。私は、その状況をサブの役割でサポートしながら、「できるようになったら良い」と思う反面、「何だか大きなことにチャレンジしているような…」と、自分たちがしている支援にどこか自信の無さも感じていました。

“試行錯誤をして活動を考えるのだけれども、違和感が残る…”そういった時間を過ごしている期間がありました。そして、段々とその違和感は、「彼らの生きてきた経験を考えると、彼らは、介助者との“やってもらう・介助される”という一方向的な関係を多く生きてきた。それを考えると、そもそも、彼らが急に、仲間と対等な関係で気遣い合ったり、助けの手を差し伸べたりすることなどできるものなのだろうか」というような整理になっていったのです。そして、「同じ障害であっても、その人に合った方法や順番があるのではないだろうか、そういった方法で教えることはできないのだろうか」と考えるようになっていきました。

しかし、「この肢体不自由の人々に教える順番って?」、「発達の順番って?」など、なかなか学びは追いつきませんでした。また、彼らを見ていると、単に社会的な経験が不足しているだけではなく、たとえば、手が動かないという機能面のハンディは、精神面の学習そのものをゆっくりにしたり、滞ることにしたりするのではないかと、という経験以外から来る影響もあるようにも感じていました。

これは一度、人間の仕組みを学ぶ必要がある、そして、“支援”はその上で考えていく必要がある、と考えました。このことから大学院への進学、人の心の仕組み＝心理学を学ぶことを考え始めます。今後続けていこう仕事という意味で考えても、きちんと人間の心の発達の仕組みを理解して、仕組みに応じた支援、また、支援の理由を人に説明できる支援をしていきたいと思うようになっていったのです。

そこから地元であった北海道へ帰り、北海道大学大学院へ進学するに至ります。この時の進学はただ学ぶということだけでなく、“人の発達について、支援現場で考えていくことができる分野”ということで臨床心理学の学びを選択します。

新卒で入職した法人で、肢体不自由のグループに配属され、そこにいた彼らととても仲良くなりました。仲良くなったからこそ、「彼らができる可能性があることなら、もっとそれができるようになったら良い」と心から思いました。そのための支援ができるよう、支援者としてしっかり学ぼうと考えるようになった、その土台をくれたのは、新卒で入職したばかりのこの3年間だった、と今では思っています。

このときが2012年です。

ここから2019年に至るまでは、また次回で書きたいと思います！

(「その2」は、第27号に掲載予定です)

本年度秋季セミナーの中止について

道内4ブロックの持ち回りにより毎年実施している日社大秋季セミナー（北海道同窓会主催）&日社大市民公開セミナー（ヨコイト等と共催）について、今年度は以下の理由により、中止とします。

標記については、今年6月の「就活セミナーin社大」開催の際、「A町にての実施」を決定していました。そして、G幹事を中心に準備を進めていたところです。

しかし、受入れの中心となる当地の社会福祉法人が、法人自身の抱える諸困難の解決に時間を要する事態となり、セミナーを開催する条件が整わなくなっていました。

現時点では、この時期から他の候補地を探し、かつ実施していくことは難しく、今年の秋季セミナーは中止せざるを得ない状況であると、正副会長等の役員協議で判断しました。

関係者各位におかれましては、「寝耳に水」状態で、大変ご迷惑をおかけします。しかし、上述をご理解いただき、何とぞよろしくお願いいたします。

なお、2020年実施分については、20年1月開催の新春セミナー時に、開催地を選定する予定ですので、同窓会員みなさんにおかれましては、「では、私の所で遣ります！」と積極的な立候補を心よりお願いするものです。

以上、何とぞよろしくお願いいたします。

同窓会活動をより豊かなものに！

道同窓会長 村上 勝彦

6月の同窓会幹事会等に参加して感じたことは、①同窓会活動の機能が著しく低下している、②他方、各支部同窓会は活性化を模索している、③したがって、社大自体がもっと積極的に行動していくべきではないか、ということでした。

そのためには、まずは我が道同窓会が、これまでの伝統と実践に基づき、社大内、同窓会内において先進的役割を果たしていくことが重要であると考えています。

具体的には、①北海道出身の在学生との結びつきを強める、②就活フェアを通じて、道出身者も含めた在学生の道内就職を推進していく、③道内にいる卒業生の状況把握に努め、年2回のセミナーへの参加を勧めていく、④実質的な同窓会員増加を図りつつ、幹事体制を強化していく、⑤「アガベ」等を通じて、同窓会員個々の情報交換と連携を図っていく、⑥「アガベ」をヨコイト等にも広めていく、などです。

日本全国どこも同様に「高齢化」が進み、同窓会自体もまた先細りになっていく危険があります。このため、社大自身が社会福祉のリーダーたるに相応しい活動を展開できるように、道同窓会がその魁になっていかなければなりません。

社大生の誇りを持って、同窓会活動をより豊かなものにしていきましょう！

道同窓会員みなさんの更なるご協力を何とぞよろしくお願いいたします。